

日本フンボルト協会 2024年度第2回常務理事会 議事次第

日 時：8月17日（土）14時から17時30分まで

形 態：Zoom オンライン会議

出席者：

伏木先生(理事長)、縣先生(副理事長)、高山先生(副理事長、関西支部長)
居城先生(北海道支部)、香田先生、守矢先生、岡林先生、高橋宗五先生、
武内先生(九州支部)、和田先生(中部支部)、山本敬三先生、
広渡先生(顧問)、櫻田先生(顧問)、関映子(事務局)

(1) 伊藤眞先生を偲ぶ会のご報告(事務局より)

7月27日(土)14時から、フンボルト協会の常務理事、日独共同研究奨学金寄附者の荒川さん、筑波大学の元同僚の先生方の20人にご参加いただいた。ドイツ文化会館4階のOAG会議室で開催した。伊藤夫人とご子息にも参加していただき、一人ずつ伊藤先生の思い出話を披露した。HPに掲載する「伊藤先生を悼む言葉」を縣先生に依頼した。

(2) 本年度の総会についてのご報告(事務局より) 現地参加が16名 オンライン参加が42名

講演会は 題目：『海洋・地球生命フロンティアの探究と持続可能性について』
講演者：稲垣史生先生(国立研究開発法人海洋研究開発機構)
(2023年シーボルト賞受賞、ご専門：地球微生物学、生物地球化学、地球システム科学)
(ご著書の紹介 DEEP LIFE 海底下生命圏(講談社ブルーバックス))

(3) 日独共同研究奨学金について

6名の応募者から以下の2名を選んだ。3名が文系応募で3名が理系応募。審査の結果以下の通り文系1名、理系1名が選ばれた。来年度の審査委員長は縣先生に願う。

以下の高垣先生からの連絡を参照。支給対象がドイツ人若手研究者であることを確認すべきか否かについての議論は次期の理事会までに内規を整理する。

当初は50万円の支給は研究者の来日時に手渡すことを考えていた。コロナウイルス感染状況により特別措置として、申請者を通じて若手研究者に送金をお願いしていたという状況。

●2024年度の採択者

1. 課 題：

「実験用ミニブタの成獣を用いた、ヒトへの外挿性の高い精神疾患の前臨床モデルの創生」
助成対象者：Nadine Bernhardt
研究分野：実験心理学的な周産期環境因子の研究(ラット、ヒト)
申請者：高垣堅太郎(山梨大学医学部 准教授、脳神経生理学、発達解剖学、
ブタを用いたライフスパン脳生理学)

2. 課 題：

「ドイツ語の項構造同定を目的とする解析システム(パーサ)の開発」
助成対象者：Julian Michael Stawecki
研究分野：Germanistische Linguistik/Computerlinguistik
申請者：宮下博幸(関西学院大学教授、ドイツ語学)

●9月になったら、申請者を通じて奨学金50万円とUrkundeの授与を行う予定。

●2025年度奨学金について 公募をHPにて告知する。
会員よりご指摘もあり、要綱の内容について更新を検討する。

(4) 来年度の総会について

場所について：京都での開催の可能性あり

開催方式について：ハイブリッド

講演会について：吉田直紀先生（2024年度シーボルト賞）に依頼済、会員として入会済

(シーボルト賞授賞式について)

授賞式は、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団の年次総会と併せて、6月29日にベルリンのベルビュー宮殿で執り行われ、連邦大統領から賞が直接授与されました。

(5) 次回のドイツ研究留学説明会の開催について（開催時期は？）

(鏗田先生からのメッセージ) 具体的な検討はこれからですが、説明会およびフォローアッププログラムについて、支部長および常務理事への協力要請をお願いします。

(6) これまでの Zoom 討論会の総括（縣先生から）別紙①

- * Archivierung の件、種村先生からご賛同頂きました。可能であれば、コンテンツを動画としてアーカイブ化できるのではないかと。講演者の許可を得る、視聴範囲を決める。
- * 講演者から了解得たものに関して、Website に掲載。
- * 了解を得た場合には会員のみ、または一般にも知らせるか。
- * 収録場所を何処にし、容量を如何にするのか、という課題。予算との関係。
- * 支部の Zoom 講演会も入れるか？
- * 開催の一覧表だけでも意味があり、フンボルト協会の宣伝にもなる。

* (事務局) アーカイブ化は難しいのではないかと。すべての動画が保存されているわけではない。講演者は永続的な公開を前提に話していないのではないかと。

* 柔軟性をもって配信すればよいのではないかと

* フンボルト奨学金研究者の研究の現状を知らせることは広報的な意味をもちうるので企画する意味がある

(7) ～～2024年10月8日、9日～～

フンボルト財団理事長 (Prof. Schlögl) と Frau Schildt (東アジア担当) の来日。

2024年10月8日、9日 Schlögl 氏は Vize-Präsident der Leopoldina として京都での STS-Forum に参加するために来日。(For the natural sciences of the National Academy of Sciences Leopoldina)

* 8日は京都大学化学研究所訪問予定（高山先生ご担当）、

ランチ会（伏木理事長と高山先生ご参加）、その後上京する。

* 9日は午前中から、専門分野の近い東京大学の幾原先生（2010年 Forschungspreis）と

大越先生（2019年 Forschungspreis）との面談を希望。幾原先生は出張のご予定で

大越先生は会議にご出席予定で面会は実現できない。お二人からはお申し出があり、それぞれの研究室を訪問して、部下の方からご案内、ご説明を受けることになった。

吉田直紀先生（2024年度シーボルト賞）がご自分の研究室の訪問を含めて、すべてに同行してくださる予定。

夜は Humboldtianer との懇親会を永田町山王ビル 27 階の「春秋」というレストランで開催。招待の人選はフンボルト側が行っている。

～～2024年10月28日～～

Frau Dr. Emily Lines (フンボルト財団ベルリン Office 副所長) と担当者の Frau Mirjam

Hamana が、日独米自然科学系会合 (詳細は不明) のために来日。28日に関西フンボルト元奨学生の会を開催予定。こちらもフンボルト側で人選が行われています。

フンボルト財団理事長 Prof. Dr. Robert Schlögl 教授とは====エネルギーシステムの未来、触媒、エネルギー貯蔵システム、持続可能性、界面化学、材料合成の未来を研究しています。彼の研究は、エネルギー貯蔵の概念のための不均一系触媒と材料に焦点を当てています。彼の研究により、彼は触媒活性材料の新しい理解に貢献してきました。最近では、将来のエネルギーシステムとエネルギー転換の複雑な課題に取り組みました。シュレーグル教授は、連邦教育研究省の資金提供を受けたエネルギー転換に関するコペルニクスプロジェクトの科学ディレクターとして、このテーマに関する自然科学と社会科学を結びつける上で大きな役割を果たしてきました。====

(8) 支部活動について (各支部での留学説明会の可能性について)

北海道支部：6月19日木曜日に留学説明会を開催。同時に支部長会と懇親会を開催。

30名の参加者があった。可能であれば支部主催の講演会も開催予定。

東北支部：2023年度中に実施できなかった大塚孝治先生（2022年度フンボルト賞受賞者）の講演会実施予定。

関東甲信越：10月26日中央大学で留学説明会の予定。

関西支部：2024年3月3日に支部総会・講演会をおこなった。

中部支部：秋に総会を開催予定。名古屋大学総長の杉山直先生の「ブラックボックス」についての講演会を予定。

九州支部：秋か冬に総会と講演会を実施予定。

(9) 日本フンボルト協会、今後の会計の見直し (高橋宗五先生) (別紙②)

現在の会費収入では経常支出でなくなってしまう。支部活動を支える財政的基盤がない。財政安定化基金から緊急避難的に50万円支出することを決定。

以下に、いただいたご意見をならべました。

- * 会費を値上げするしかない。
- * 会費の値上げは若い世代にとってはあまりいい方策ではない
- * 会費収入の問題を短期的にどうするかと、中長期的な問題とがある。
短期的には寄付を含めたことを考えるべきか。寄付が必要か？
- * 財政安定化基金から一部を一般会計に移すのは緊急避難的な措置ということ。
- * 会費というお金を払う意味があることを説明すべき。
会費とは会によって目的が違うので会費として求められるものが違ってくる。
- * この財政状況ではフンボルト協会が立ちいかななくなることを会員にアピールすべき。
会費を払う意味があることをアピールする。
- * 会費とは日本フンボルト協会が考えている日本の大事な学術研究において、善意の寄付なのだ
というふう説明していくしかないのでは。
- * 会員をどうやって増やしていくか。まずは奨学金を受ける研究者を増やしていくこと。
とにかくドイツ語学習者が減っている。
- * フンボルト財団には、奨学金が受けやすいように留学期間を選べるなど、融通をきかせて
もらうことを提案する。

- * 支部での講演会で、若手の Humboldtianer の講演を取り上げる。その研究報告が履歴に書ければ次につながる。そこでの討論で新しいテーマを見つけることもできる。
若手はフンボルトから帰国したら成果を披露してほしい。
- * フンボルト協会の講座を有料で開催する。

- * 特許を持っている人がいないか。
- * 印税の入る本を出している人がいないか。
- * 東西が合併したときには活動が盛り上がった。
今ではフンボルト協会の活動が見えなくなっている。
コロナで総会も開けなくなり、会員同士の接触の機会がすくなくなった。
- * 会費収入で運営できることが基本ではないか。基本に戻って活動を見直すべき。
活動の在り方を見直してくべき
- * 国際交流、日常交流は良しとして学術交流を Zoom 講演会等で実現しているのでこれを地道につなげていく。それぞれを拡張していくことが地道な活動につながる。
- * 日独共同研究奨学金はとても良い宣伝材料となっている。
- * 講演会を開催していくことは広報活動につながる、それを地道に続けていく。
- * ニューズレター郵送後にもう一度メールでも会費納入のお願いを特別にする。郵送したものを開封していない場合もあるのでメールであれば届くのではないか。
今後の会報デジタル化にもつなげていくという意図もある。
- * HP の検索システムの更新が必要ではないか。問い合わせから見えてくるのは一定程度検索システムは使われていること。
- * フンボルト奨学金について先輩が後輩に伝えていくことが大事。
アフターケアが充実しているとか、ドイツ留学の魅力を伝えていくこと。
とにかく日常の地道な取り組みが大事。
- * ドイツでこういう研究をしたというつてが見つかりにくいケースがあるのでそれが留学説明会で補えるといい。
- * 過度のイベント開催に反対。留学説明会ばかりに頼らないで、地道に研究会とかの有効な仕方
で継続することが何より大事。それにより次の世代の若手を集めていくべき。

(10) その他

- 2024 年度号はこの常務理事会の結果も掲載して、すぐに郵送する。
理事長からは年会費のお願いが一面にあるので、会費収入の増加を期待したい。
- ニューズレターの今後のデジタル化について
(デジタル化した場合の年会費の徴収方法について)
郵送料の値上げがあることと、郵送手続の煩雑さを考えれば今号を最後にデジタル化する。
- 長期未納者の扱い（一度も支払ったことのない 438 人をのぞいて今回は出すことにした）
- 今後の Zoom 討論会について
 - ① 9 月 21 日（土）18 時から DAAD 友の会と共催で村川泰裕先生講演会（別紙③）
「ヒトゲノム解読への挑戦」 西川伸一先生が司会を担当
 - ② 10 月 21 日（土）より西川伸一先生による AI 講演会
「ChatGPT: 生命誕生 38 億年目の創発」（仮題）
- 高橋義人先生からの情報の件（募集要項は 別紙④）

高橋先生から以下のお願いがあった。
協議の結果、以前に依頼があったときと同様、HP には掲載せず、

メールで通知することとした。

大阪に本社のあるヤンマー・ホールディングスはディーゼル・エンジンを教えてくれたドイツに恩義を感じ、山岡記念財団というものを数年前に発足させ、「日本と欧州（ドイツ語圏）の若者文化・ライフスタイルの研究」を中心のドイツ研究に研究助成を行っています。日本と欧州（ドイツ語圏）に在住する 40 歳未満の研究者が対象です。テーマに沿った人文社会科学的な研究に助成されます。国籍・所属を問わないので、去年の助成者には日本人の他に、ドイツ人、中国人がいました。

伊藤先生が理事長の時代、研究助成についてのアナウンスを日本フンボルト会で流していただきました。それを今後もお願いできないでしょうか。ホームページと理事会用の ML の両方で流していただければ幸いです。なお私は、この記念財団の発足以来の評議員をつとめています。高橋義人

●次回の常務理事会開催日程 12月22日（日）14時から

=====

以上